

福祉オンブズおかやま会報 第38号 2009年10月

■生井久美子著

「ゆびさきの宇宙-福島智・盲ろうを生きて-」を読んで

盲ろうを生きる福島智を通して社会のありようを問う

9歳で視力を失い、18歳ですべての音を奪われた全盲ろうの福島智。母の考案した「指点字」と「指点字通訳」の実践で、コミュニケーションの手段を得、多くの支援者の下で、盲ろうとしてわが国ではじめて大学へ進学、卒業後、都立大学助手、金沢大学助教授を経て、いま、東京大学先端科学技術研究所教授を務める。彼の全容に迫るのが本書だ。

目が見えないとは、どういうことか。盲ろうを生きるとは、どういうことか。全盲ろうの福島は、自ら背負った問いに、「見えない、聞こえない現実を受けとめて生きる。その上で何が自らの人生を豊かにするのかを問うことだ」と答を出した。

生井さんがこの福島智の魅力に引き込まれ、追っかけ、膨大なインタビューなどをもとに編集した書き下ろし。生井さんは、彼の前向きで、真摯な生き方を紹介して、読む人に「生きるとは何か」を示唆してくれる。

全く見えなくて、聞こえない全然盲ろうとなった人たちのたどる道は、その多くが自殺だ。生井さんも最も知りたかったのはこのことだった。最初のインタビューで「自殺を考えたことはなかったのですか」と問うと、「それはないと思います。あわてなくても、いずれ、みんな死にますから」と答えている。彼は死ぬことより生きることを真剣に考えた。

「盲ろうになって失意のうちに盲学校に戻った春、友人が福島の手ひらに指先で直接ひと文字ずつ書いてくれた。『しさくはきみのためにある』。光と音を奪われても、福島にはなお残されたものがある。『思索はキミのためにある』と。

「僕は何日も何日も考えた。なぜ僕だけがこういうふうな苦難を与えられるのか。そうしてあるところに到達した。それはもし、神様がいたら、いままでの聞こえていた耳、見えていた目、それをもって僕をこういう状態にしたのは何か。それには深い意味がある。この世の中には、病気とか、薬害とか、事故で僕ときと同じ状態の人がいると思う。僕はこの苦しみをその人たちのために、役立たせようとされているのではないか、というふうな思えたんだ」

「智は、本を読み続け、思索を深め、少しずつ、また、光を見出していく。それは落ちきったというふしぎな安堵感でもあった」。

福島智は、苦難の末、自分には使命があると考え、「生きる」ことにしたのだった。

だが、日本の社会で盲ろうを生きることは、そうたやすいことではない。福島は「盲ろうとは、現代の秘境に生きるようなものだ」、「盲ろうは命は奪われないけど、社会から黙

殺され、抹殺されている」という。

生井さんは、この福島の無念の叫びを、見過ごすわけにはいかなかった。ジャーナリストとして告発したかったのではないか。「盲ろうの福島智はいま、ここに生きているぞ、黙殺も抹殺もさせてなるものか」。本書には生井さんのそんな思いが込められている。

またこの本の中には、生井さんがインタビューなどで福島智から真髓を究めた言葉を引き出している。その一部を紹介したい。

◎みんな一様なものからは、なんの進歩も生まれ ない。また、異なるものをただ一様にならそう とする努力からもなんの進歩も生まれ ないだろ う。

◎障害者は、人工的な概念で、その本質は、社会 によってつくられ、再生産される状態や状況、 関係性そのものなのだ。

◎障害の問題をつきつめると、能力主義の問題に ぶつかる。福祉がどうあるべきか、といっても 生産能力の価値づけと、それに適応した財の分 配の問題を考えないと、根本的に何も変わらな い。

◎能力の差があることを否定するのではなく、能 力の差によって、一定の処遇の差があることを 否定するものでもありません。否定するのは、 能力の差とその人の存在の価値を連動させるこ とです。

連動させてしまう人間の存在の内面にくいこむ 差別的なもの、価値の序列的体系がある。

(事務局次長 桐山 宗義)

この本の印税は、全額、盲ろうの方々への支援に役立てていただけるよう、関係団体などにお届けいたします(生井)

■特定非営利活動法人

「湘南ふくしネットワークオンブズマン (Sネット)」 概要紹介

その仕組みと理念

福祉オンブズマン活動には、行政主導型・施設単独型・情報公開型・施設団体主導型・地域ネットワーク型等の活動があります。S ネットは「地域ネットワーク型オンブズマン活動」で、利用者とオンブズマンの関係だけでなく、施設、職員、家族そして市民の協同型の活動として1997年から開始している。

地域ネットワーク型オンブズマンの定義は、「基本的には一定のエリアの複数の福祉施設が組織の母体となり、オンブズマン組織を導入し、施設のサービス向上、利用者の権利擁護活動を進めているもの」とされています。

S ネットは、知的障害者施設、身体障害者関連施設、高齢者関連施設、又は家族会と利用契約を結び、2名以上の担当オンブズマンが、月1回施設を訪問、施設には必

ずオンブズマン協力員という職員がおり、利用者とオンブズマンのパイプ役を果たしている。

オンブズマンが受けた相談事項や要望は、担当オンブズマンが調査し、その場で解決できないことについては、オンブズマン委員会で検討し、施設に是正する必要があるときは、質問書・意見書・要望書を、重大な相談事項や要望に対しては、勧告書・警告書を施設に提出すると同時に、相談者にその旨を通知する。

施設は是正・改善の意見を受けて必要な措置を講じ、施設単独で解決できない事項に対しては、加盟施設の施設長で構成するS ネット 21 と連携して解決を目指し、ときには関係機関や団体にも是正を求めています。

S ネットはその立ち上げに当たって「オンブズマン活動宣言」という5項目の宣言を定めています。

1. 私たちは「権利」を「その人らしく生きるために欠かせないもの」ととらえ、これを守り、かつ実現するために活動します。
2. 私たちは「権利」を奪うこと、特に体罰、虐待、拘束などを絶対に許しません。
3. 私たちは、その人自身から決めたこと、考えたこと、訴えたことを尊重し、秘密を守り、最善の利益のために活動します。
4. 私たちは、障害者・高齢者・児童一人ひとりが市民と地域社会でもともに暮らせるよう、社会の変革に努めます。
5. 私たちは利用者の人たち、まわりにいる人たち、地域のあらゆる人たちと協力し、ノーマライゼーション社会の実現をめざします。

事業内容

1. 障害者・高齢者・児童・本人の立場に立つ家族・職員・施設関係者からの声を受け止め代弁していく
2. 任意後見・法廷後見
3. 地域生活支援のための情報提供及び啓発
4. オンブズマンの養成と研修
5. 書具愛車・高齢者・児童のための権利擁護に関する研修・出版
6. 権利擁護に関する講師派遣
7. 成年後見センターの運営

■資料

右記に掲載の新聞記事は、生井久美子さんが、1994年朝日新聞 聞家庭欄に連載した『付き添ってールポ老人介護の24時間』の初回を再録したものです。

この連載は1994年6月1日から12月31日までの7ヶ月間に実に40回にわたって連載されました。

第1部 ルポ老人介護の24時間

第2部 読者からの反響

第3部 高齢先進国に学ぶ

以上の3部構成で、後に本となって出版されています。

◎生井久美子さんプロフィール

朝日新聞記者。京都市生まれ。上智大学文学部心理学科卒業。1981年、朝日新聞入社。仙台支局、政治部、学芸部、地域報道グループなどを経て、09年4月から生活グループ。95年家庭面の連載「付き添って」でアップジョン医学記事賞を受賞。医療や介護、福祉の現場の取材を続ける。近年、夕刊一面連載企画「ニッポン人脈記」シリーズで、障害とともに生きる人々を綴る「ありのまま生きて」(07年4月)、最期まで生きる人々を訪ねた「みんな、その日まで」(08年3月)など。

著書に『私の乳房を取らないで-患者が変える乳ガン治療』(三省堂)、『付き添って-ルポ老人介護の24時間』、『介護の現場で何が起きているのか』(以上朝日新聞)、『人間らしい死を求めて-ホスピス・「安楽死」・在宅死』。共著に『新聞記者の仕事』(岩波書店)、『私の体のまま抱いて』、『死刑執行』(以上朝日新聞社)など。

『ゆびさきの宇宙-福島智・盲ろうを生きて』(岩波書店)の
著者紹介から転載

「繋がる」シリーズ(2) この人に会いたい!

ドキュメンタリー映画監督

想田 和弘(そうだ かずひろ)さん

今をときめく人、地味だけどがんばっている人、会ったら元気が出る人、そんな方々をご紹介しますシリーズ「この人に会いたい!」第2弾は、ニューヨーク在住のドキュメンタリー映画監督 想田和弘さんにお話を伺いました。

想田監督は、1970年、栃木県足利市生まれ。1993年からニューヨークに在住、劇映画やドキュメンタリーを制作し、これまでにNHKのドキュメンタリー番組を合計40本以上演出、中でも養子縁組み問題を扱った「母のいない風景」は01年、テリー賞を受賞されています。観察映画第1弾のドキュメンタリー映画『選挙』(07年、アステア配給)は、世界中の映画祭に招待され、英BBC、米PBS、NHKなど約200カ国でテレビ

放送されました。アメリカでは、放送界のピューリッツァ賞と呼ばれる最高の栄誉、ピーボディ賞を受賞されています。日本では、参議院選挙の直前に全国で劇場公開され、話題を呼びました。観察映画第2弾『精神』(08年、アステア配給)の舞台は、岡山市内にある精神科診療所「こらーる岡山」です。この映画は、釜山国際映画祭とドバイ国際映画祭で最優秀ドキュメンタリー賞、マイアミ国際映画祭で審査員特別賞、香港国際映画祭で優秀ドキュメンタリー賞を受賞。ベルリン国際映画祭など、世界中の映画祭から招待が殺到しているそうです。現在、劇作家の平田オリザ氏と青年団を被写体にした観察映画第3弾『演劇(仮題)』を撮影中。

東京大学文学部宗教学科卒。スクール・オブ・ビジュアルアーツ映画学科卒(ニューヨーク)。

— 監督は、今年上映された『精神』という“観察映画”を撮られたわけですが、「福祉」についてどのように思われていますか？

監督 僕にとって福祉というのは、自分にとっても周りの人にとっても必要なものだと思います。福祉＝「弱い人に手を差し伸べる」ものとされ「福祉の財源を切り詰めるべきだ」とか「もっと自立するべき」という言葉が聞こえてくるほど、日本では強者が弱者を助けるものであって、どこか「他人のためのもの」というイメージがありますよね。しかし、いつ自分が障害を負うかわからないし、「老い」という現象は誰にでも起こる自然な自分自身の問題です。自分の身において考えたときどうか？と考えると、人の手助けが必要になります。だから僕にとって福祉は、当然自分に必要なシステムなんです。他人のためだけのものではない。

— 確かに、福祉はいわば他人事で、自分のことではないと思っている人は多いかもしれません。映画『精神』で実際に接してこられた患者さんの感覚は、どのように感じられましたか？違う意識があると感じられましたか？

監督 診療所に通う人々は、良くも悪くも「病気」というレッテルを貼られます。医者による「診断」も、とらえどころのないものに名前を付けるという意味で、ある種のレッテルですからね。患者さんには、そのレッテルをある程度受け入れている人が多いと思います。そういう意味では、他人事というよりも当事者としての意識がありますね。

まあ、実際にレッテルを貼ることが必要なこともあり、役に立つこともあります。僕自身は学生時代に「燃え尽き症候群」と診断されたとき、とてもスッキリしたんです。「燃え尽きた原因を取り除けばいいんだ」と思った。そしてそれまでの生活を改めたら、ケロッと治った。自分で自分を見つめなおすことができたんです。また、医者による診断があれば、場合によっては福祉サービスなどが受けられるという、実益もある。その反面、レッ

テルを貼られることで、社会から不当な扱いや差別を受ける危険性もあるし、自分自身に否定的な気持ちを抱いて苦しくなることもあります。あるいは、貼られたレッテルが不正確だったり、間違っていることもある。そうなると大変です。

— みんなの勝手なイメージで貼られているということですか？

監督 誰が何のためにレッテルを貼るのが問題ですよ。残念ながら、レッテルの多くは、「社会のためのレッテル」でしょう。ある人が精神を病むことで、その周辺の社会が動揺する。だから本人に「キチガイ」というレッテルを貼ることで、社会から切り離す。そうやって、人々は社会の安定化を図ってきた。患者さんもそれを否応なしに押し付けられてきた。でも精神を病むということは誰にでもおこり得ることなんです。僕が病気になったとして、そのような扱いを受けたくはありません。

— 今監督はニューヨークにお住まいだそうです。ニューヨークと日本をくらべて、精神科の患者さんの扱われ方に違いを感じることはありますか？

監督 基本は同じですね。アメリカでは、心の問題を抱えたときにカウンセリングを受けることが、当たり前のこととして受け入れられている。多くの人に、行きつけのカウンセラーがあるくらいです。しかし、精神疾患で入院するとなると、あっという間に違う世界に行ってしまう。タブーにされてしまう。そういう意味では日本と変わりません。

— 大学を卒業されたとき、日本の中では閉塞感があったから外国へ行かれたそうですが、そのアメリカでは受け入れられたと感じましたか。

監督 うーん、どうかな。ニューヨークでは、外国人でもあまり特別な目で見られないという点では、オープンだと思います。人口の過半数が外国人ですから、価値観の多様性も広く認められています。でも、本当に社会の中核へ食い込むのは、マイノリティーにはまだまだ難しいでしょうね。アフリカ系の大統領がこの間やっと登場したくらいです。壁は厚いですよ。

— 私たち福祉に携わる者は、「当事者主体」ということをよく言います。私たちは、当事者を主体として接してきているつもりですが、支援者という立場を離れて、一個人としてこの映画を観た時、普段聞きなれているはずのことが、強烈に迫力を帯びた声に聴こえ、日々の仕事の中で「支援者」という役割を演じていることに気づかされました。結局は、支援者とは当事者から見ると外部の人間なんだなあ、と。

監督 患者さんたちにとっては、僕も「外部からの珍妙な来訪者」だったと思います。ただ、僕は支援者ではないので、患者さんたちは、支援者にはなかなか見せようとしなくて、別の素顔をカメラに向かってみせてくれたのではないかと思います。つまり、患者と支援者の間では、「患者はこうあるべき」、とか「支援者はこうあるべき」という常識の中で普段の交流があると思いますが、映画の撮影に対しては、決まった常識がない。少なくとも、別の力学が働くわけですね。だからこの映画は、支援者の皆さんにも新鮮だったのではないのでしょうか。

— 撮影現場の中で、監督が見られて「支援者としての常識」「福祉の世界での常識」を感じたことはありましたか？

監督 支援者の中には、患者の利害を考えれば映画を撮るべきではなかったという声もあります。患者さんは今までの経験をカメラの前で赤裸々に語られますが、映画を観た方から「あのようなシーンはカットした方がよかったのではないか？」という声が上がってきました。被写体としての同意を得ても、その得た同意そのものが正しい判断ではないのではないかという議論もあります。そういう声は、当事者よりも支援者に多かったように思います。それは患者の立場を守るためのものだと思います。その気持ちはとてもよくわかります。しかし、制作者と被写体という立場からみれば、被写体を勝手に「保護」することには違和感を感じました。被写体が「自分の顔を出していい」というのに、作り手がそれを見せないことは、逆に差別なのではないかと思いました。

— 本人主体と言いながら、やはり保護しようとする力が働くのですね。

監督 精神障害者といわれる人を、いきなりそのありのままの姿をカメラの前に出すようなことはできない、保護しなくては、という意識。それは、支援者の意見としては、むしろ健全かもしれません。あらゆるリスクを排除して、患者の安全を守ろうという立場の人にも必要だと思いますから。でも、僕は支援者ではなく、あくまでも映画の制作者です。だから、僕は制作者としての感覚を大事にすべきだと思いますし、大事にしたからこそ、『精神』のような、多くの支援者にとっては“非常識な”映画を作って公開できたのだと思います。まあ、僕も患者さんや支援者と同化してしまえば、摩擦がなくなるから楽なんだろうけど。でも、それでは良い作品はできません。また、既存の常識が支配しすぎると、精神障害者を取り巻く環境も変わらないでしょう。

— あえてモザイクを外し、(精神障害者といわれる人を実名でそのままの日常を映画にするという)タブーに挑まれたわけですが、リスクを冒していることについては？

監督 モザイクをかけると、被写体から個別性や人間性が剥ぎ取られ、「精神障害者」という記号に墮してしまいます。そして、文字通り「顔の見えない存在」になり、偏見や差別を助長してしまいます。そのようなことをするくらいなら、僕は映画を撮らない方がマシだと思います。だからこそ「モザイクをかけない」という点には最後までこだわったのですが、おっしゃる通り、リスクはありますよね。でも、あらゆる表現にはリスクがつきまとうものです。逆に言えば、毒にも薬にもならない、リスクのない表現には、訴求力もないでしょう。僕としては、映画に出てくれた患者さんたちが社会からより強い差別を受けたり、非難されたりするリスクを最も恐れていたのですが、そういうことが起きたときには、一緒に全力で闘おうと決意していました。幸い、そのようなことは今のところ起きていませんが。

— この記事のテーマなのですが、「つながる」ということについて、どう感じられていますか？

監督 誰かとつながり続けていくということは、面倒なことだと思うんです。つながりを切ることとはとても簡単。映画でもモザイクをかければ責任放棄ができて、被写体の方とも関係を切ることができます。例えば、映画の公開を前にして「やっぱり自分の場面はカットしてほしい」と言い始めた患者さんもありました。そこでモザイクをかけてしまえば一件落着ですし、同時に責任も関係もなくなる。しかし、僕はそうはしたくなかった。あくまでも患者さんと対話を続け、公開に納得してもらおうと同時に、僕なりに責任を負いたいと思いました。僕は今もその方と関わり続けています。それは、ある意味大変な作業でもあります。でも、迷惑かけたり、衝突したり、触発しあったりしながら、人と深く関わることこそが、「生きる」ということでしょうか？今の世の中で多いのは、それが面倒だからといって、人との関係を切ってしまうことです。今や人と会わなくても、全部メールで済ませてしまえますしね。でも、その先には孤独がある。人間は、他人と関わるのは面倒くさがるくせに、孤立しては生きていけません。

障害のある方には、「人の世話になりたくない」と感じて、助けを求めない人も多いと聞きます。でも、ボランティアにしても、「してあげる」「してもらおう」という一方的な関係ではないはず。ボランティアする方も、それで生き甲斐を感じられたり、元気をもらったり、メリットがあるわけでしょう？なんでもそうだと思うんです、頼ることも頼られることも、実は対等な取引なんです。助けることで助けられているんです。

さっきの話に戻ると、僕の映画の撮影に同意をした患者さんにも、「撮られたい理由」があったはずなんです。つまり、撮りたい僕と、撮られたい患者さんとの間に、利害の一致があった。だから映画が実現したわけですね。そこに同意がある限り、「したいこと」と「してもらいたいこと」は一方通行ではなく双方向の矢印なんだと思うんです。無理矢理撮ったわけじゃないんですから。とてもシンプルです。

— お忙しい中、ありがとうございました。最後に「福祉オンブズおかやま」の皆さんにメッセージをお願いします。

監督 衝突を恐れず、人と関わりあうことって必要ですよ。ですから議論することが大事だと言いたい。腹を割って、ぶつけ合っていくことが大切なんです。この映画がそのきっかけになって欲しいと思っています。